

## グローバル化する互酬性—サモア儀礼交換の 新たな展開

山本, 真鳥 / YAMAMOTO, Matori

---

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2014-06

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520999

研究課題名(和文) グローバル化する互酬性—サモア儀礼交換の新たな展開

研究課題名(英文) Globalized Reciprocity: Development of Fine Mat Exchange in Samoan Transnationalism

研究代表者

山本 真鳥 (YAMAMOTO, Matori)

法政大学・経済学部・教授

研究者番号：20174815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：戦後粗悪化したファインマットの復興運動は2003年から政府の政策となった。女性の仕事の再評価と現金収入の方策が主眼であった。同時に儀礼交換の縮小は政府の方針である。しかし一方、上質ファインマットは退蔵されている。粗悪なファインマットは姿を消したが、それに代わって儀礼交換に供されているのは、粗悪品と質的には代わらない巨大ファインマットであった。世界中に広がるグローバルなサモア人社会を結びつけている儀礼交換は、それなりの機能があり、形をかえてサモア社会に生き延びていくのであろう。

研究成果の概要(英文)：The production of fine mats which are used in Samoan ceremonial exchange was revived in 1990s. Between 1970 and 2000, rough 'fine mats' which were no more fine had been mostly produced in a week or a few days whereas authentic one took a woman for 6 months or one year. Samoan Government also started the fine mat policy in 2003 to evaluate women's role in the society and to give women a measure of income generation. Fine mats were now officially commodified. Nevertheless, the very fine mats produced under the government scheme are stored under beds and not generally used in ceremonial exchange. Instead, special large mats which are as rough as abandoned 'fine mats' in quality were mainly used in ceremonial exchange. In the transnational Samoan world, the ceremonial exchange is still functional in connecting Samoan people in different communities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学／文化人類学・民俗学

キーワード：国際研究者交流 サモア；トンガ；ニュージーランド 文化人類学 互酬性 トランスナショナリズム  
グローバル化 移民 文化政策

## 様式 C-19、F-19、Z-19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) サモア社会の伝統的な互酬経済は、第二次大戦後、海外への移住が広範に生じるとともに、その海外から本国への送金がインパクトとなって、大きな変容が生じた。互酬的に行われる儀礼交換の経済は、その中で過剰に加熱してきたといえる。入念な儀礼とファインマット（パンダナスの葉を細かく裂いて編んだもの、従来は畳1畳分より若干大きい位）の交換は、従来は格の高い首長とその家族の間で行われるものだったが、移民の送金により、格と関わりなくファインマットの数が競われるようになった。かつては格が高ければ高いほど、多くのファインマットのやりとりをしたものだったが、現在では、移民となっている親族が多ければ多いほど、多数のファインマットの贈与が可能となった。

(2) さらに、送金をして貢献してくれた海外の親族に、反対給付としてファインマットが流出するようになり、変容の第二段階を迎える。海外からは主として送金の形で現金がフローし、その反対にはファインマットがフローしていった。ファインマットは、海外からの現金の貢献に見合うものとして、後には、海外からの現金を引き出すものとして海外に流出した。それと同時に進行したのが、ファインマットの粗悪化である。従来半年から1年をかけて製作されていたファインマットは、しまいには2~3日で粗製濫造されるようになった。

(3) 1990年頃に新しい変化が訪れた。NGOが女性の現金収入の方策として、上質ファインマット事業を始め、同時にファインマット復興の流れが始まった。政府が連携するのは2000年後のことである。文化政策としてファインマットの復興を行うようになって、新たな局面を迎えた。しかし一方で、儀礼交換は人々の順調な日常生活を損ねるとの見方から、儀礼交換縮小を推奨する動きもある。

## 2. 研究の目的

(1) 背景にある(3)の状況について、文化人類学的調査を行い、サモア本国社会とグローバルサモア人世界（トランスナショナルな移民コミュニティも合わせてサモア人というネットワークで形成されるコミュニティの総体）における儀礼交換の新たな展開の動向を調査することが目的である。

(2) ファインマット復興運動に関する、政府、NGO、村の婦人団体、個々の編み手、等のアクターの動向を調べる。

(3) 移民社会も含めたグローバルサモア人世界の儀礼交換のあり方について、動向を調べる。

(4) 比較のために、やはり儀礼交換を行い、

似たような貴重財をもつトンガ社会のファインマットや樹皮布の生産や、海外コミュニティを含めた儀礼交換の実施について情報収集を行う。

## 3. 研究の方法

(1) 人類学の参与観察とフリートーキングのインタビューとを併用した。政府発行の文書や公共放送で販売しているビデオデータ、新聞記事等、参照できる文書や映像も収集した。

(2) サモア政府の女性・コミュニティ・社会開発省女性局の許可を得て、上質ファインマット政策の調査を行い、ファインマット製作視察に同行した。ファインマット製作のために村に作られているウイメンズコミティの上質ファインマット製作活動を観察し、編み手にインタビューを行った。NGOの上質ファインマット製作の沿革とシステムについて調査を行い、NGOの地方視察にも同行させてもらうことができた。

(3) それらの組織と無関係にファインマットを製作している編み手や、市場でファインマットを売っている人々に対してもインタビューを行った。

(4) 儀礼交換に関する政府の方針やそれにしたがった儀礼交換縮小のキャンペーンについて、また最近行われている儀礼交換についての情報の収集を行った。

(5) ニュージーランドのサモア人コミュニティにて、ファインマットの動向について、観察やインタビューを行った。またトンガ人コミュニティでもインタビューを行った。

(6) 似たようなファインマットや樹皮布を製作するトンガに赴き、それらの製作や利用に関してインタビューを行った。

## 4. 研究成果

(1) 海外移民の数が増えるにしたがって、本国でも移民先でも儀礼交換が盛んに行われるようになった。儀礼交換が行われる度に、海外から本国へ、現金が流れ込み、それとは反対方向へとファインマットが流れるようになっていく。それに伴ってファインマットの粗悪化（この粗悪化したファインマットをララガと呼ぶ）が生じた。海外にはララガが多く滞留していた。また、実際には昔に作られた上質ファインマットも海外に流出傾向にある。移民社会ではないが、隣国のアメリカ領サモアは早くから現金経済の導入が進み、その結果ファインマットの新たな製作はほとんどされおらず、サモア独立国から儀礼交換を通じてファインマット（大量のララガが主）が流入したり、サモア独立国から持ち込む人から大量に買ったりする現象が生

じた。

(2) 1993年頃から、Women in Business Foundation（現在は Women in Business Development）という団体が、ニュージーランド ODA の女性開発事業の援助を受け、女性の現金収入獲得推進として、ワークショップや編み手の育成を始めた。試行錯誤をしていくうちに、過去に行っていたパンダナスの葉の複雑な処理の仕方を知っている人を発見し、過去に行っていた1ミリから2.5ミリ程度の幅に裂いた葉を利用して編む方式の指導法を確立した。これが2000年頃のことである。また、上質ファインマット購入予定者と編み手とを仲介し、予定者からは2週間毎に支払いをしてもらい、WiBD が編み手の仕事の進行具合を監督して、実際の仕事量に応じて2週間毎に支払う方式を確立した。これによって、編み手は順調に作業を進めることができる限りは、定期的な現金収入をもつ保証ができ、生活の安定化を図ることが可能となったのである。一方2003年頃から、女性・コミュニティ・社会開発省は、傘下のウイメンズ・コミティ（村落毎の婦人会）にファインマットを作るファレララガ（編み物の家、一緒にファインマット等を編む共同作業のグループ）を作るように要請し、上質ファインマットの生産を指示したのである。さらに、ワークショップの開催を行ったり、定期的にファインマット製作への視察を行った。

(3) 政府がファインマット復興運動を行う先駆けとなったのは、首相が WiBD の要望を入れて母の日に行った2003年の演説である。そこで首相は、女性の社会に果たす役割として伝統的なファインマットの製作を褒めたたえた。また首相は、儀礼交換で粗悪品のファインマットを用いることをやめようと国民に呼びかけた。さらに、上質ファインマットの復興を目指して、ファインマット常設委員会を作り、自らイニシアチブをとったのである。この委員会は首相が自ら委員長を務めるが、女性省を中心とする役人の他に、WiBD から委員の参加がある。この委員会では、ファインマットの規格化が進められ、公式名称としてイエ・サエが用いられることとなった。イエ・サエを編むパンダナスは、ラウ・イエという種類の葉で、これを切り取ったのち、真水で10分～15分ゆで、葉を表裏で2枚に分け、表のみ用いる。これを海水にさらして白くし、巻いて保存する。編むときには細かく裂き、表面が外側に来るよう2枚を合わせ、二重にして斜め平織りに編んでいく。イエ・サエは9アガ×12アガ（アガは30cmほど）、パンダナスの葉の幅が1mmから2.5mmまでで、その細さによって1等級から3等級まで、とされる。また、ファインマットのサモア語名称であるイエ・トガ（トンガの布の意味）は間違っているので、今後イエ・サモア（サモアの布）と呼ぶべきである

と定めた。

(4) こうして上質ファインマットの生産は増加した。以前は、ファインマットは贈与に用いられるべきものであり、ファインマットの売買には後ろめたさがつきまどっていたが、人々の間でマットを売ること、買うことはごく普通のビジネスとして語られる行為となった。WiBD のプログラムで製作を行う人ばかりか、完成後に大金を入手することを励みに製作に励む女性も現れた。ただし、イエ・サエの規格に合うファインマットを作ることのできる女性はまだまだ数少ないし、1枚の製作に6ヶ月から1年もかかるので、他のカテゴリーのファインマットと比べると生産高は少ない。また大変高価なものであるために、実質的に国内での販売は限られ、海外のサモア人やトンガ人に対しても販売する結果となっている。またサモア政府や教会が海外からの重要な訪問者に贈ることもある。

(5) 一方、儀礼交換の現場を見てみると、イエ・サエが用いられることはほとんどない。首相がララガの使用中止を呼びかけた後、粗悪品はほとんど用いられることはなくなった。多く出回っているのは、巨大サイズのファインマットで、質的には粗悪品と同様のものであるが、大きさが面積にして数倍ある、というものである。実際に粗悪品ファインマットを何枚もつなげたと思われるものもある。次第に増えているのは、イエ・サエほど上質ではないが、イエ・サエに使うような、きちんとプロセスした葉をもっと大きく裂いて作ったファインマットであり、こちらはファレララガで技術がそこまで高くない女性たちが編んでいるものである。目が粗いから、製作にイエ・サエほど時間がかからずでき、イエ・サエに比べてずっと生産高も多い。政府は、儀礼交換があまりに人々の家計に負担を強いていることが経済発展の阻害要因となっているとの認識から、儀礼交換を華美に行わないように人々を指導している。ファインマットは上質のイエ・サエを1枚だけ贈ることを推奨しているが、それはなかなか難しいのが現実である。イエ・サエを買える人はごく限られているが、それらは親や自分自身の葬式などごく限られた場面で用いられることを想定して、長らくそのためにしまっておく財として購入することが多い。また娘の結婚式にそのようなファインマットを婿方に贈る場合もあるが、大変限られた場面である。

(6) ファレララガに所属せずに、巨大ファインマットを作る女性は多い。巨大ファインマットはイエ・サエやその材料を用いたもう少し目の粗いファインマットに比べて、作りやすく、長期の保存に耐える。また、イエ・サエは作成に時間がかかるし、それを売る以外にはない。巨大マットの欠点は、大きすぎて

持ち運びに不便であることだが、逆に大きさにおいて人々を圧倒し、感動を与えるという側面もある。また、イエ・サエを作るのに半年～1年かかるのに対し、2～3ヶ月でできる。巨大フィンマットも市場で売り買いできるし、自分が必要とする儀礼交換が生じたときには、儀礼交換に使うこともできる。そのような便利さが、巨大フィンマットにある。それにとって代わる可能性が高いのは、イエ・サエの材料を用いた若干目の粗いフィンマットで、こちらも市場で取引可能であるし、自分の関与する儀礼交換に供出することもできる。

(7) トンガ人の購入が多いとの話で、トンガでの調査を行った。トンガでも儀礼交換にはマットや樹皮布が多数用いられるが、それらは必ずしも高価なものではない。トンガ人でイエ・サエを購入するのは、貴族や金持ちであり、一般の庶民ではないが、それらは家宝として家の財産とするためである。用途としては、婚礼などの晴れの行事に際して主役がまとうものとされている。家宝は母から長女がもらい受けることが多く、それを一族で交代で使用する。使用後はまたしまつて、次の出番を待つ。このような社会環境にある場合、イエ・サエの購入はきわめて理にかなったことであるといえる。一方で、サモアではなぜイエ・サエの購入がそこまで進まないかは、トンガの事例を見ると明らかである。サモアでは、フィンマットは贈与するためのものであり、繰り返し公共の目にさらして自分の所有物であることを確認することはできない。フィンマットを贈与するときのみ、それが自分のものであったことを人々に誇示することができるが、それは一瞬のことである。その誇示が大変貴重な瞬間であるような、たとえば親の葬式のためにそれを求めることはあっても、遠い親族の葬式であればそれはしまっておく、ということになる。したがって、サモア人はイエ・サエはあまり購入しないが、購入したらそれを退蔵するという結果になるのである。

(8) 以上の調査結果から、いくつかの結論が導き出せる。① 互酬的交換として行われる儀礼交換は、サモアではなかなか廃れそうにない。政府の統制が及ぶところもないわけではないが、及びにくいのが普通である。それは互酬的に行われる儀礼交換が、サモアの社会構造に深く根付いた制度だからである。② サモア人を互いに結びつける儀礼交換とフィンマットは、グローバルにかつトランスナショナルに展開するサモア人コミュニティを結びつけるのに大きな役割を果たしてきている。③ ファインマット復興運動によって多くのイエ・サエが作られるようになり、サモアの誇りは取り戻すことができた。しかしそれは、フィンマットをさらなる商品化へと送り出す結果となった。④ しかし、商

品としてのフィンマットを多額な代償を払って入手する人がフィンマットに見いだす価値は、伝統的なものであり、フィンマットを伝統的価値観として貴重であるとする言説はさまざまな場面で未だ健在である。それだけの価値があるからこそ、大金を払っても入手しようとする人々がいる。フィンマットの贈与は儀礼交換のハイライトであり、その場面に来ると多くのサモア人のテンションが上がり、即興のダンスが始まる。稀な機会に登場するイエ・サエを見る人々は固唾をのんで見つめている。フィンマットの登場しない儀礼交換は美しくない、と人々は考えている。⑤ 政府の儀礼交換縮小の働きかけは大いに理性的な対応であり、サモアの近代化にとって必要なものであるといえる。しかしそれはなかなか達成が難しい問題である。イエ・サエを1枚だけ贈与して済ませる、というのは難しいのではあるまいかと考えるが、イエ・サエと同じ材質で目の粗いフィンマットの普及は意味あることかもしれない。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① 山本 真鳥、生殖補助医療と家族関係、研究会「戦後派第一世代の歴史学者は21世紀に何をなすべきか」編『「3.11」と歴史学』有志舎、査読無し、pp.275-290、2013
- ② 山本 真鳥、トンガ調査覚書—サモア産フィンマットを追って、経済志林、査読無し、pp.289-307、2013
- ③ 山本 真鳥、民族誌と歴史人類学、そして歴史学、研究会「戦後派第一世代の歴史学者は21世紀に何をなすべきか」編『私と歴史学』有志舎、査読無し、pp.115-123、2012
- ④ Matori Yamamoto, Role of Japanese Anthropology in the World System of Anthropological Knowledge, Ribeiro, Gustavo Lins ed. Global Anthropologies, Intellectual Property Publishing House, 査読無し、pp.85-92, 2012
- ⑤ 山本 真鳥、サモア社会に公共空間は存在するか?、柄木田 康之・須藤 健一編『オセアニアと公共圏—フィールドワークからみた重層性』昭和堂、査読有り、pp.88-106、2012
- ⑥ 山本 真鳥、選挙制度のグローカリゼーション—サモアの近代、須藤 健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』風響社、査読有り、pp.123-153、2012
- ⑦ 山本 真鳥、京都大学ポナペ島調査と南洋群島、クライナー ヨーゼフ編『近代〈日本意識〉の成立—民俗学・民族学の

貢献』東京堂出版、査読無し、pp152-165、2012

- ⑧ 山本 真鳥、太平洋諸島移民アーティストの身体と芸術のかたち、床呂 郁哉・河合 香吏編『“もの”の人類学』京都大学学術出版会、査読無し、pp.263-269、2011
- ⑨ Matori Yamamoto, Nationalism in Microstates: realpolitik in the Two Samoas, Keizai Shirin (The Hosei University Economic Review), 査読無し、vol.78, no.3, pp.283-299, 2011

[学会発表] (計 7件)

- ① 山本 真鳥、ファインマットの旅、第31回日本オセアニア学会研究大会、高知市国民宿舎桂浜荘、2014年3月21日
- ② Matori Yamamoto, Globalized Reciprocity: Development of Fine Mat Exchange in Samoan Transnationalism, 17<sup>th</sup> World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Manchester University, August 8, 2013
- ③ 山本 真鳥、儀礼交換と文化政策—サモアにおけるファインマット復興運動の展開、日本オセアニア学会年次大会、日光総合会館、2013年3月23日
- ④ 山本 真鳥、南太平洋サモア独立国の首長制と民主主義—普通投票選挙制導入後の20年、日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学、2012年6月23日
- ⑤ Matori Yamamoto, Tourism and Remittances: Samoan Travelers between Migrant Communities and Home, Annual Meeting of American Anthropological Association, Montreal Convention Center, Montreal, November 17, 2011
- ⑥ Matori Yamamoto and Cindy Yoshiko Shirata, Evolving Transnationalism in the Asia-Pacific Region: The Perspective of Social Science in Japan, Conference of Association of Asian Social Science Research Councils, Manado, Indonesia, October 17, 2011
- ⑦ Matori Yamamoto, Ethics of Anthropology in Japan, IUAES Inter-Congress, AAS and ASAANZ, University of Western Australia, Perth, July 6, 2011

[図書] (計 2件)

- ① 山本 真鳥・山田 亨編、ハワイを知るための60章、明石書店、2013、379-8 (64-69, 74-88, 94-104, 122-140, 300-304, 324-328)
- ② 小谷 汪之・山本 真鳥・藤田 進、土地と人間、有志舎、2012、287 (115-213)

[その他]

ホームページ等

<http://www.t.hosei.ac.jp/~matoriya>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 真鳥 (YAMAMOTO, Matori)

法政大学・経済学部・教授

研究者番号：20174815

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし